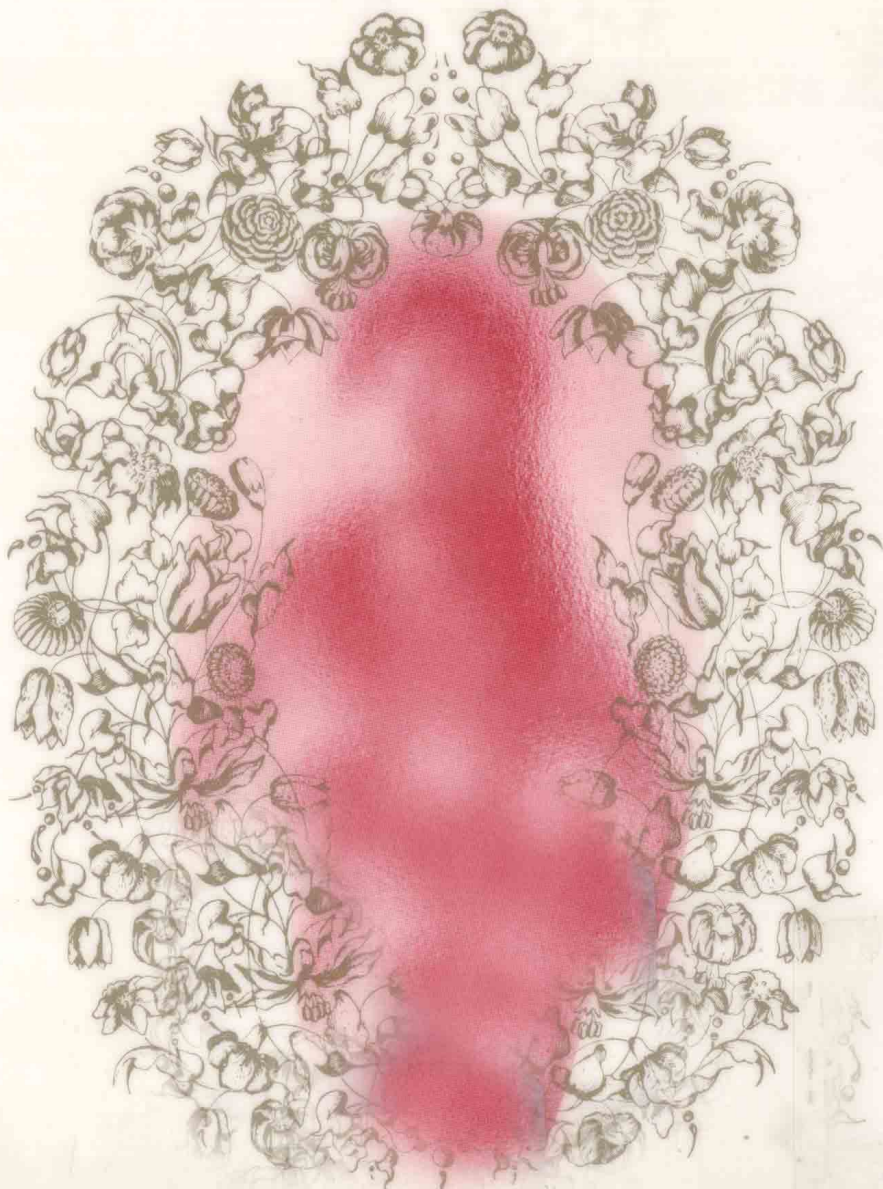


女の長風呂

田辺聖子



女の長風呂

田辺聖子

© 1978 Seiko Tanabe

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

女の長風呂

一九七三年二月十五日 第一刷
一九八六年六月十日 第二十八刷

著者 田 辺 聖 子

発行者 西 永 達 夫

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町三―三
電話(〇三)二六五―二二二一

印刷 図書印刷
製本 加藤製本

万一落丁乱丁の場合はお取替え致します

目次

I

女のムスビ目 1 1

いら、う女 1 6

×××しよう！ 2 1

愛のオンバイ 2 6

男の欲望 3 1

女の性欲 3 6

面食いの単純さ 4 1

性の河原 4 6

強姦と女心 5 1

付け根考 5 6

公衆ベッド 6 3

ポルノについて 6 8

乱交パーティーの視線 7 3

II

III

淫風 78

潜在願望 83

四十八手 88

子供より男 93

セーラー服の女学生 98

わが愛の中学生 103

男の長ドス 108

紫の上 115

オヤ&ムスコ 120

男は「六せる」 125

処女 130

女は「五たい」 135

身内とエッチ 140

IV

青大将 145

情を通じ…… 150

初潮 155

変身 160

コレクターの栄光 167

拝観女の姿態 172

ワイセツの匂い 177

わが愛の不良たち 182

男のオナカの情感 187

夜這い 192

仙境の法悦 197

男は色情狂 202

往生 207

V

痴漢 212

女の出撃 219

月のさわり 224

早熟 229

混浴に於ける考察 234

男の品さだめ 239

きらいと好き 244

ファウンデーション 249

男の見当はずれ 254

夜ごとの復縁 259

パツ、サツ、スカツ 264

女の長風呂

アート・ディレクター
本文カット
奈良葉二 粟屋 充

I



女のムスビ目

私の住んでいる場所は、（いま、こうやって書いているところ）神戸の下町である。

神戸だったって、ハイカラでモダンな所ばかりとはかぎらない。このへんみたいな、がらがらした下町もあるのである。

ウチの前をストンと南行^さると、（神戸では浜へ向けて南へいくことをサガル、という）かの有名な福原遊廓のどまんなかの柳筋になる。故に、わが住む町は、夜中まで嫖客の足音が絶えぬ、パトカーのサイレンが鳴る、H会や、Y組のチンピラがうらのアパートでケンカする、福原の三流バーのホステスが買物籠を下げて、うろうろしていて、長雨になると沖仲仕のおっさんはしかたなく朝から酒をくらって歌っている声がかきこえる、そういうところで、角^{かど}つこに清元温泉がある。大將が清元が好きなのか、はたまた、元来そういう名前なのか、ともかく、そういう風呂屋（銭湯）がある。

だいたい、この町は氣風潤達と見えて、風呂屋へいくのに男は夏はステテコ一丁、冬はパジャマ、あるいはねまきにチャンチャンコ、というふうていであるのだ。かえりにねまきを着るなら、さもありなん、だが、行きにすでにねまきを着てゆくんだから、この町の住民がいかに物に捉われない生き方をしていくか知れるというもの。

家の前、清元温泉を東へいくと、湊川神社^{みなとがわ}になって、要するに、われわれは湊川神社の氏子といふべきなのだ。誠忠無比の忠臣の余香を拜する地域に住んで、ねまきで風呂へいくというのは、申しわけないようであるが、楠公サンというは、神戸市民にとっては及びもつかないこわい神さまではなく、たいへん親しみのある人なので、住民もその親しさに狎^なれて、楠公サンの思惑を意に介してる風はない。湊川、（つまりこの町内のごくちかく）は楠公サンが戦死した場所なのである。

ところで、風呂の中で大ぜいの女が入って何の話をしているのかと男は思うだろうが、男の思うほどの話は出ないものである。たとえば清元温泉でなくて、ほんとの湯治場の温泉へいくとする、かなりリラックスしていても、男ほどのことはない。男はうちつれて温泉なんかへいくとする、そしてまた、うちつれて風呂なんかへ入ると、もう、何をしてるかわかりはしない。何の話をしてるか、神のみぞ知る、である。リッパな紳士が（彼はすぐれた音楽家でした）風呂の中で同行の紳士連と何かのコンクールをして（何のか知りません）熱中のあまり、湯舟へポチャンと落ちた、なんてのを話すのをきくと、うらやましいくらいのものである。

女ははだかになっても、そんなあけすけなことではなく、氣どっている。同性同士でも氣どっている。いや、同性だから、よけい氣どっているのかしらん。ちょこちょこツとうまくかくして洗ひ、相手より一秒でも早く湯舟に飛びこもうとしたりする。相手も、湯舟からしげしげ觀察されたりしてはかなわないので、負けずに飛びこむ。そうして上るときは申し合わせたようにサツと同時に上つてあわてふためいて拭き廻して、吹き出る汗をぬぐいもあえず、スリッパに頭をつっこんだりにしている。べつに見せたつてちびるものでもないのに、同性に見せ惜しむ。その割に電光石火の一べつを投げあつて、(だいぶん下腹が出てゐるわ)とか、(あんがい、しなびてゐるじゃない)などと、ぬからず要所要所を看破してゐるらしい。

そういう、かくし廻つてゐる所から、たいした話はでるはずないが、どうも、それは、女の習性みたいなもので、私は女がかくしたりウソをついたり元兇は、月々のちょっとした例のアレから來てゐると思う。

「いいですか、決して人に氣取らせてはいけませんよ、何でもないように身じまいよくして、お便所を出るときも汚していかないかよくよく氣をつけて、スカートにも汚れはないか、氣をくばつて」

と、母親や女教師から何くわぬ顔をしつけられる。女は図太く、モノをかくすようにかくすようにしつけられて、神秘めかしく大きくなってゆく。同輩うちつれて風呂へはいり、何かのコン

クールをして熱中して湯舟へ落ちるなんて、朗々たることができようはずはないのである。何となくウサンくさい、ウソつきの、かくしたがりに育ちまうのである。

だから、初夜体験なんかでも、ほんとのことを話してる人、あるのかなあ、と私は疑問に思う。男の話をきいていると、彼らはそれまでの人生で、たいてい一つ二つのまがり角というか、ムスビ目のコブをもっている。戦中派だと、たとえば、敗戦のショックとか、学生運動の挫折、なんてことをいう。

しかし女には、そんなものがない。

男はムスビ目があるかんじで、女はそれがなく、ツルンとしている。

そこがふしぎ。中には、戦中派の女や戦後派の女、たまに男と同じことをいいたてる人もあるが、少なくとも見たかんじは男ほどではないみたい。女の、そういうムスビ目は何だろう？ と小松左京氏にいったら、彼はさも嬉しそうに、

「そら初夜体験やんか」

と答えていた。しかし、思うに、女にとっては、それもムスビ目になり得ないことが多いんじゃないか。小松ちゃんにかぎらず男はみな、そういいたがるようだけど、どうかなあ。

それより、女は、実際の体験よりも、そういう知識を仕入れたときのほうが、ショックが大きくて、ムスビ目になっているのか知れない。どんなにおぼこなお嬢さんでも、もう私たちの時代